

第7回 秋田市エイジフレンドリーシティ構想推進協議会 議事録

日 時：平成24年6月29日（金） 15時00分～16時15分

場 所：秋田市役所議場棟 第2委員会室

委員の定数：9人

出席委員：7人

- 1 開会
- 2 秋田市福祉保健部長あいさつ
- 3 議事

（1）今後のエイジフレンドリーシティの進め方について

資料1、2をもとに、事務局から今後の進め方について説明を行った。

会 長	本推進協議会は今回が最後であり、具体的な行動計画の策定については、今後組織再編をして進めていくとのこと。事務局の説明に対して質問、意見、提案等はないか。
委 員	秋田市の協議会へ初めて参加したが、自分にとって非常に良い機会となった。今後も外から協力していきたい。
委 員	庁外分科会と庁内調整会議で行動計画の話し合いが持たれるという取り組みは新しく、とてもいいと思う。
委 員	高齢者の私自身もようやくエイジフレンドリーシティという言葉に慣れてきた。雄和地域の福祉施設などにも浸透してきており、自分も携わってきたんだなと実感が湧いてきた。また、海外で秋田市の取組を発表したことで、少しずつ始まってきた、形になってきた、という思いがする。
委 員	協議会へ参加し、高齢化社会をどのように作っていくかということについて、幅広い見方ができるようになった。これから市民が自ら行動して行動計画を作っていく予定だが、市民がこの構想を本当に自分のものとして捉えているのか、ということを見ると、まだまだハードルが高いと感じる。「こういう社会を作っていこう」という思いが市民の中に醸成していくような計画を作っていきたい。
委 員	協議会へ参加したことで、自分の普段の生活や仕事において、エイ

ジフレンドリーの視点で考え、行動するようになった。今後もこの考え方を広めていきたい。また、WHOグローバルネットワークへの参加都市として、秋田市の行動計画が世界の中でも先進的なものとして世界の高齢化社会にヒントを与えるような存在になってほしい。

委員長 高齢者福祉の現場に携わる者として、様々なことを考える非常に良い機会となった。自分も含めた団塊世代の意識次第で今後の世の中が変わっていく。このような中で、秋田市が積極的に高齢者にやさしいまちづくりに関わっていくことを示したのは、本当にありがたいことである。また、行動計画を庁外分科会等でもんでいくとなると、かなりスピーディーに進めていかなければまとめていくのは困難だ。その中でも、いろいろな方々からの多様な意見を踏まえて進めてほしい。市民の意見を取り入れた形有るものを作ってほしい。

御所野学院の郷土学の授業の中に「高齢化社会と福祉」というテーマがあり、そこで三回ほどエイジフレンドリーシティについて話す機会があった。生徒は「自分たちの問題」として捉えてくれた。このように、いろいろな場面でエイジフレンドリーシティを広げていくことが大切であると感じた。

会長 これまで、本推進協議会は秋田市に提言を出し、パンフレット制作の一翼を担った。今後の計画策定について希望することは、計画が完成したら終わりではないという点と、高齢者は施策享受者であると同時に実行者として活躍してほしいという点である。高齢者が計画を作り、行政が実行する、というものではない。事務局の手法はまだまだ行政と市民との間に距離がある。この手法では行動計画ができたとしても、本当に市民の手で実施していけるのだろうか。市民が最初に動き出す際には、行政として情報、場所、人的、経済的支援など何らかの支援をし、市民を自立させていくことが現実的である。走り出す前の綿密な計画が重要であるから、キーパーソンの検討、十分な準備や仕込みを行ってから動き出してほしい。

(2) 第11回IFA高齢化国際会議についての報告

資料3、4をもとに、事務局から報告を行った。

会長 国際会議での発表内容には、本推進協議会の紹介といった内容もあったのか。

事務局 冬期の取組について報告したため、推進協議会については発表して

いない。

会長 本推進協議会には、若い方や高齢者が含まれており、これが秋田市におけるエイジフレンドリーシティ議論の縮図である。秋田市の取組としてぜひ世界に発信してほしい。今後WHOがグローバルネットワークのサイトを立ち上げた際には、是非秋田市の提言を、少なくとも要約を、載せてほしい。

国際会議へ参加した印象をさらに詳しく報告してほしい。

福祉保健部長 プラハ市内の交通機関が非常に印象的であった。時間制のチケットを買うと、その時間内であれば地下鉄、路面電車、バスのいずれも何度でも乗車可能というものであった。大変良いシステムであり、これも一つのエイジフレンドリーなのかもしれないと感じた。観光客が多く、中心部は大変にぎわっていた。

会長 チェコ共和国のエイジフレンドリー度はどの程度か。

福祉保健部長 街には石畳が多いことから、エイジフレンドリー度は高いとは言えないのかもしれないが、これは歴史を重んじているからこそである。街によって優先順位が違うという印象を受けた。

会長 エイジフレンドリーの目指すべき形が同じであれば、世界各国が同じ都市空間となってしまう。何を大切にするかという価値判断とエイジフレンドリーをどう融合させるかという問題に繋がる。

委員 以前、車椅子利用者と一緒にプラハを訪れたことがあるが、石畳が多く大変だった。特に観光地は坂道が多く苦労した。

事務局 国際会議への参加は、出発前から大変であった。例えば、テーマやスケジュールに関する詳細情報が直前まで入らなかった点や、会議主催者のIFAや現地事務局との事務手続きが大変であった。

現地では、大阪大学経済学の先生の「高齢化に関しては、海外都市は周回遅れであり、高齢化率が高い日本の取組が先進的である。」との言葉が印象的だった。海外から学ぶとすれば、市民参加の仕方であると感じた。会議では、ボランティア活動における教会の役割について話題となった。歴史的、文化的、宗教的に日本人にとって馴染みがない部分だが、その中でも学ぶべき点は、徹底的に市民の声に耳を傾けるというものだった。また、ニューカッスル市のエイジフレンドリー担当者と話す機会があり、エイジフレンドリーの取組はとても大変なものだが、これまで我々は市民一人一人、様々な団体の代表者の声

を聞いてきた、との言葉をいただき、大変励まされた。やはり市民の声を聞くことが大切なのだとここでも感じた。今後もWHOのウェブ上で、こうした有意義な情報交換をしていきたい。

会長 日本でも阪神淡路大震災の際にボランティアが社会的な動きとなり、昨年の東日本大震災後、海外の教会とはまた別に、明らかに日本型のボランティアの概念が定着していると感じる。

委員 庁外分科会の民間事業者とは誰を想定しているのか。

事務局 今後設定するテーマに関連した民間団体や企業の代表者を想定している。

委員 市民の声を聞くべきだということから、ボランティア関連の民間団体を多く入れてほしい。

事務局 参考とする。

委員 秋田市の発表に対して何か質問はあったか。

事務局 日本、ロシア、カナダの発表者に対して、冬期に怪我をした際の責任の所在について質問があった。また、カナダに対しては、まずは移民問題に取り組むべきという意見がインドの参加者から出た。

委員 高齢化率が高い国、県ということで、海外の関心はどうだったか。

福祉保健部長 その点に関して会議での質問はなかったが、休憩時間に台北の参加者が我々に感心を示し、名刺交換を行った。

委員 国際会議への出席、発表は招待があったのか。時間はどれほどだったか。また、会議の正式名称と毎年開催のものであるかを教えてほしい。

事務局 I F Aから招待を受けての参加、発表であり、時間は1時間半であった。正式名称は“IFA 11th Global Conference on Ageing - Ageing Connects”であり、二年に一度各国持ち回りで開催している。学会的な要素もかなりあったが、発表者は大学研究者、NGO、行政関係者など様々であった。

会長 高齢者自身が事業展開している事例の報告はあったか。

事務局	カナダのある団体が実施したグランマキャンペーンについて報告があった。アフリカの高齢女性をカナダに招待し、ボランティア活動などを行っているカナダの高齢者と交流させたところ、エイズ孤児の問題に取り組むという新たなキャンペーンがそこから生まれたそうだ。その後アフリカに帰国し、自らそういった活動を始めたということだ。
会長	地元での活動がもちろん重要であるが、それを進めるためにも、ある時は外部との交流や情報交換も大切である。 その他意見がなければ、これで議事を終了する。

4 その他

事務連絡

秋田市エイジフレンドリーシティ構想推進協議会委員の任期は7月1日付け満了のため、委員の活動日程は本日の会議を持って終了とする。

5 閉会